

東亜同文書院記念基金会ニュース

第25号

2023年4月～2024年3月



Contents



第30回 東亜同文書院記念基金会授賞式 -02

東亜同文書院記念基金特別奨励賞・栄誉賞授与 -17

本間先生欽慕の会・荒尾東方斎先生墓参・根津山洲先生墓参 -18

東亜同文書院大学記念センター活動レポート -20

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

第30回東亜同文書院記念基金会授賞式

第30回東亜同文書院記念基金会授賞式が2024年3月4日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第30回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第30回となる今回は、功労賞として蔡玉平氏が、奨励賞として石田卓生氏が選ばれました。

〔功労賞受賞者〕

蔡 玉平 氏

長年にわたり霞山会と上海交通大学との協定に基づく研究・学術交流、および留学生交流事業の大学側担当として業務に精励され、日中間の相互理解の推進ならびに研究交流の発展に貢献されました。

さらに2004年～2006年には霞山会と上海交通大学校史研究室が共同で行った史実に基づく「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に熱意をもって取り組み、日中双方が評価しうる成果を取りまとめるため尽力されました。

〔奨励賞受賞者〕

石田 卓生 氏

平成三年に愛知大学文学部中国文学部専攻へ入学され、満州国文学を通して作者が書院卒であったことから東亜同文書院および中国語教育に関心を持ち、さらに愛知大学大学院中国研究科へ進学して研鑽を重ね博士（中国研究）の学位を取得されました。

近年それらの成果は二冊にまとめられ刊行されました。その一冊目は個別論文の成果をまとめた「東亜同文書院の中国語教育に関する多面的研究」で、もう一冊は書院の中国語教育の根幹を担った「『華語萃編』初集」で現代の視点から翻訳と総訳を行いリニューアルした出色の成果として評価されます。

〔授賞式挨拶〕

広瀬 裕樹 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・

愛知大学学長）

皆様、こんにちは。ただ今ご紹介に預かりました基金会の会長を務めております広瀬と申します。本日は皆様にお忙しい中、この東亜同文書院記念基金の授与式にご参集賜り誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。先ほどの授賞式の通り、お二人の方に授賞することになりました。この基金の趣旨については先ほども説明ありました通りですけれども、東亜同文書院の経営母体であった東亜同文会に関わる研究の調査成果、あるいは顕著な実績を認められた個人に表彰するということとなっております。

お二人に関しましては、先ほどの表彰の中でも申し上げましたけれども、詳しくはこの後の推薦の中でまたご紹介賜るとして簡単に改めて申し上げますと、まず蔡先生につきましては、長年にわたり霞山会と上海交通大学との協定に基づくご研究をなさっておられ、また、上海交通大学側の担当者としてご貢献



なさいました。さらに特定の研究として、上海交通大学と財団法人霞山会の歴史に関する共同研究に取り組みました。日中の関係の歴史の研究に大きく貢献されたものとして今回表彰をいたしましたところでございます。

また2人目の石田様に関しましては、愛知大学にご入学後、中国語研究に関心を持たれ、愛知大学の大学院進学後もさらに深められた中で、東亜同文書院のご研究にご関心を持たれ、それを進められてきたということでございます。

お二人ともまさに先ほど申し上げたこの東亜同文書院記念基金の授与の趣旨に合った東亜同文会に関わるご研究をなさったという意味で大きな貢献をされたといえるかと思えます。日中韓の関係は色々ございまして、特に政府間は今あまり芳しい状況ではないと理解をしておりますが、いかなる時であつてもベースとなる歴史研究、史実の研究と

いうのは冷静に進められるべきです。本会といたしましては、特に東亜同文会、東亜同文書院の歴史的意味を冷静に評価していただきたいと感じているところでございまして、その意味でもお二人のご業績というのは非常に素晴らしいと思います。日中関係の未来を作る上で重要な礎になるものと思っておりますので、お二人のご業績を顕彰いたしますことは本会にとつて本意とするところであります。ますます今後このご業績を発展していただいて、さらに深く研究、色々なご活動を深めて頂きたいと心から思っております。以上で簡単ではございますが、お二人の受賞に対して改めて心よりお祝い申し上げますというところで、私の挨拶と代えさせていただきますと思います。本日はどうもおめでとうございました。

〔功労賞推薦の辞〕

阿部 純一 氏(霞山会理事長)

ただ今ご紹介いただきました霞山会の阿部でございます。皆さん、おはようございます。今年も3月になりました、例年通りこの霞山会館で東亜同文書院記念基金会の表彰式を開催できることを、本当に心から嬉しく思っております。

すでにご承知の方も多いと思いますが、昨年の夏、昨年11月に退任されました愛知大学

の川井学長が当会の赤坂事務局にお越しくださり、私に愛知大学の理事就任を強く要請されました。大変光栄なお話でしたが、私はここ数年、前立腺ガンの手術や予後の問題を抱えており、健康上の不安がありました。そのため、一度は躊躇しましたが、川井学長の強い後押しを受け、何かお役に立てればとの思いで理事就任をお引き受けいたしました。

就任後、これまで4回ほど理事会に出席させていただきましたが、愛知大学の事情についてまだ不案内な面もあり、理事の職責を十分に果たしているとは言い難い状況です。しかし、愛知大学と霞山会との関係はこれまでに以上に強くなったと感じております。

さて、本日の表彰式ですが、今回の授賞式では、功労賞は上海交通大学の蔡玉平様、奨励賞は石田卓生様に授与されることとなりました。蔡玉平様については後ほど詳しくご紹介いたしますが、一言申し上げるならば、蔡玉平様は四半世紀以上にわたり、霞山会と上海交通大学との交流の窓口として重要な役割を果たしてこられました。上海交通大学と東亜同文書院との歴史的関わりを究明する調査研究に大きく貢献されており、その功績は功労賞にふさわしいものと考えております。

また、石田卓生様については、この後、藤田先生から詳しいご紹介があると思いますが、長年にわたって中国語教育の研究に携わり、その成果を2冊の著書にまとめ出版され

ています。1冊は『華語萃論』初集の訳編で、もう1冊は東亜同文書院の中国語教育に関する多面的研究です。どちらも学術的に高く評価されるべき内容です。こうした研究を踏まえ、今後のさらなる研究の発展を期待し、奨励賞を贈らせていただく次第です。

蔡玉平様、石田卓生様のお二人の受賞に対し、心からお祝い申し上げ、私の祝辞とさせていただきます。この度は本当におめでとうございました。

引き続きまして、功労賞の推薦の言葉として、蔡玉平様の業績をご紹介させていただきます。

蔡玉平様は現在、上海交通大学日本研究センターの副センター長として勤務されております。昨年の3月18日に学内で兼務されていた国際交流業務を定年退職され、現在は日本研究センター副センター長としてご活躍されています。

霞山会との関係を申し上げますと、1998年の10月7日に上海交通大学で共同シンポジウムを開催いたしました。その際、霞山会と上海交通大学、上海日本研究交流センターの3者間で学術交流の協定を結びました。この協定を実行するにあたって、上海交通大学の窓口となったのが蔡玉平先生でありました。

蔡玉平先生は1998年11月から霞山会の招聘研究者として来日され、大阪産業大学で日本語学を研究されていました。その後、

2001年に帰国されてからはずっと霞山会との窓口役を務めてこられました。

この記念基金会で既に何度か受賞対象となっておりませんが、特に2004年から2006年にかけて、霞山会と上海交通大学の講師研究室が共同で行った史実に基づく共同研究は非常に重要なものでした。広瀬学長もおっしゃいましたように、今の日中関係は必ずしも芳しいわけではありませんが、2004年から2006年の頃は比較的安定していた時期でした。この時期に行われた研究は非常に適切であったと思います。

この研究では、1920年代以降の東亜同文書院と上海交通大学との交流や、日中戦争が本格化する前の交流、第二次上海事変後の東亜同文書院による上海交通大学の校舎の借用、その経緯、戦後の東亜同文書院と上海交通大学の資産処理問題、東亜同文書院OBと上海交通大学との交流再開などを包括的に調査しました。当時の研究者の多くが既にご存命でないことを考えると、この研究は後世に残る貴重なものとなりました。

この調査研究において、上海交通大学側の研究コーディネーターとして蔡玉平様が果たされた役割は非常に大きいものでした。こうした功績により、蔡玉平様を東亜同文書院記念基金会の功労賞受賞者として推薦させていただきます。

以上でございます。どうもありがとうございます。



〔受賞挨拶〕

蔡玉平氏

尊敬する広瀬裕樹会長、尊敬する阿部純一理事長、ご来賓の皆様、こんにちわ。5年半ぶりに一般財団法人霞山会に訪れることができ大変嬉しく存じます。

本日は東亜同文書院記念基金会より功労賞を受賞いただき、誠に光栄でございます。ここでは中日交流のために私がこれまで行ってきた活動を評価していただいたことに、東亜同文書院記念基金会に感謝の意を申し上げますとともに、阿部理事長はじめとする霞山会の力強いご推薦により、心より感謝致します。

1998年10月9日、35歳だった私は上海交通大学国際合作と交流処処長の童澄教授の推薦の下で、財団法人霞山会の奨学金

の支援をいただき、念願の神戸にわたり留学生活を始めました。留学する時の身元保証人は東亜同文書院卒業生、神戸学院大学元学長の倉田彪士教授でした。日本に来たばかりの頃のことはもう若くないので記憶も薄れていますが、中国上海に滞在していた当時3歳だった娘、蔡匡迪が恋しくてたまりませんでした。

私は神戸で勉強生活を始めましたが、神戸の夜の静けさは当時の上海のにぎわいとはかなりギャップがありました。それに、当時は日本語も全く話せませんでしたので、最初は日本での生活がなかなか慣れず、放課後は家でぼんやりすることが多かったです。

日本での留学に迷いが生じ始めていたその矢先の1999年12月。私は神戸で交通事故に遭い、軽トラックとの衝突で体を壊してしまいました。その頃私は霞山会に招聘された中国人留学生になったので、霞山会の倉持由美子部長に報告して、療養のために上海に戻りました。

上海に戻った後、私は倉持部長からのご挨拶の手紙をいただきまして、倉持部長と国際交流処長の童教授、そして家族の励ましのおかげで私は交通事故による体の傷と自信のなさを克服し、2000年の3月末、神戸に戻り留学生活を再開できました。この場をお借りしまして倉持部長をはじめ、ご心配して下さり励まして下さった霞山会の友人の皆さまに、改めて心から感謝申し上げます。

非常に光栄なことに2002年6月、上海交通大学に戻った後、私は日本との交流を担当することになり、日本で学んだことを仕事に活かす機会に恵まれました。それ以来、当時の財団法人霞山会および愛知大学のことをより深く知ることができました。その後、光栄なことに、上海交通大学において霞山会および愛知大学との学術交流・協力の担当者に任命されました。

2004年から私は上海交通大学と財団法人霞山会が共催する史実研究プロジェクトに参加し、事務担当として研究チームをサポートしました。それから、2年間にわたって霞山会と愛知大学からの学者の訪問を手配したり、ご案内したりしました。2008年には史実研究成果発表の中日セミナーを成功裏に開催させました。

2002年から2010年までの8年間は、近年の中日関係において最善の時期といえることでしょう。その時期にこのプロジェクトの全過程に参加することができて大変光栄です。

近年、日本の世論調査のニュースで日本の中国に対する好感度が10%以下になり、中国の日本に対する好感度も徐々に低下していくと目にしましたが、非常に残念に思っています。この状況を変えるためには我々の協力を強化し、積極的に民間友好の役割を果たすべきだと考えています。

私個人としては1998年に日本に留学

する前は、日本社会についてよく知りませんでしたし、日本文化にもあまり興味がありませんでした。ですが、4年間の留学生生活を経て、日本社会についてある程度理解できるようになりました。日本文化に強く興味を持つようになりました。その上、日本人の友達も何人かできました。これは相互理解とコミュニケーションが自然に導いた結果です。日本人と日本社会に対する認識も日常生活を通じて形成されていくものです。

本日は東亜同文書院記念基金会より功労賞を授賞していただいたことに大変光栄に思うとともに、基金会からの励ましに深く感謝いたします。

今回の受賞は私の中日交流における活動のゴールではありません。むしろ、新たなスタート、出発点と信じております。2023年3月、私は上海交通大学の国際交流処で定年を迎え、日本研究センターに再就職するこ



とになりました。日本研究センターは中日交流のための重要なプラットフォームです。

私はこの新しい役職で引き続き中日間の協力に尽力し、上海交通大学と一般財団法人霞山会および愛知大学との学術協力のため、中日とりわけ両国の若者たちの相互理解のために、微力ながら精一杯努力いたします。

最後になりますが、改めて東亜同文書院記念基金会、一般財団法人霞山会のご厚情に深く申し上げます。そして、一般財団法人霞山会および愛知大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

〔奨励賞推薦の辞〕

藤田 佳久 氏（愛知大学名誉教授）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました藤田と申します。現在、東亜同文書院大学記念センターのほうにぶら下がっているといえますか、研究をそちらのほうでも続けさせてもらっています。今回は奨励賞として石田先生を推薦させていただきます。書いてあるものがありますからそれを踏まえながらご紹介させていただきます。

石田氏は昭和48年、1973年生まれで、平成3年1991年、愛知大学文学部の中国文学専攻へ入学されました。中国文学が元々のベースです。こういう研究者の人が今まで表彰されたこともありますけれども、近年

では珍しいです。中国文学をベースにしたところと、作品の中でどんなふうにかかされてきているかと言うと、個人個人の研究分析というのが非常に得意であるというふうに思われます。今は色んな研究に展開していますけど、彼の1つの基調は人物史といえますか、つまり人物の思想であるとか行動であるとかを中心に展開しているところが非常にユニークであると言えます。

まず最初は、東亜同文書院の卒業生の中で大内隆雄（山口慎一・本名）という卒業生の方に注目して、その人を通して東亜同文書院の存在を知られたわけです。特に満州文学という分野の中でそういう研究をやられました。日本人のほうから言うのと、彼はその分野での第一人者の方だと思うのですが、そこで書院、および中国語教育への関心を非常に抱かれたわけであります。そして、さらに愛知大学大学院ができ、中国研究科ができ、この修士課程に進まれ、さらに博士課程へも進学されました。この間、図書館にもぐりこんで色んな文献調査も一生懸命やられた、という姿を私も見ております。東亜同文書院の教育、特に中国語教育の研究によって博士号を得られました。今は博士と言うと新しい何々研究という分野をカッコ付けで付けますけども、先生の場合は中国研究ということとで学位を取得されました。その後もこの分野の研究をさらに進めつつ愛知大学、あるいは豊橋創造大学とか浜松

医科大学、静岡大学とか色んな大学で非常勤というかたちですけれども、中国語を中心に各大学で教鞭を執られておられます。

これらの研究成果は、先ほどの阿部理事長様からご説明がありましたように、2冊の大きな本にまとめられました。これが最近の大きな成果であります。その1冊が『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』ということで、東京にあります不二出版から平成元年、それまでの色々な個別研究を1冊の本にまとめられ出版されました。その中では東亜同文書院がどういうような経緯で創設されたのか、あるいは第二次上海事変で、先ほど阿部理事長様からご紹介あったように、この第二次上海事変で校舎が焼かれてしまった時に、この際一気に北京に進出したらどうかという構想もあったりしましたが、結局それは実現しませんでしたけれども、そういうような経過の話もありました。

そして通訳従軍の研究で、3期生を取り上げています。従軍中、1人の学生が戦死して、一同が大変なショックを受けて帰校したという大きな事件がありました。また、日清貿易研究所の教育がどのようなであったかという研究もあります。書院の前の研究所、日清貿易研究所は荒尾精が関わった学校ですが、ここでも、東亜同文書院の中国語教育の様々な分野に関しまして、さすが文学の研究者だけあって非常に丁寧な研究をされています。私なんかざくばらんにやってしまうよう



なところも、非常にこだわってきちんと分析しているというところが非常にユニークで優れていると思います。そういうような小論文を1冊にまとめますが、結構厚い本です。持ったまま読むのは、腕が疲れるぐらいです。文字通り書院を多方面から研究されたという点で高く評価されていいのではないかと思います。

それから、もう1冊が一番新しい作品ですが、阿部理事長様からご紹介ありました中国語教育の研究です。東亜同文書院における中国語教育というのは、基本的なシステムが出来上がるのは、『華語萃編』と言うタイトルの教科書ですけれども、全部で4集あります。それは1年生用、2年生用、3年生用、4年生用と順次完成していくわけで、その最初の第1巻目を初集と言います。この初集の教科書を中心に、これを現代だったらのようになるだろうか、古いものをそのまま出すのではなくて、現代に居直らせた形で翻訳

をされて全体を現代語訳にされたという面白い視点がありました。これを読んでいくと当時の先生たちが学生たちに何を教えようとしたのか。日常生活の中の上海特有、あるいは中国特有の非常に面白い事象も含めながら、教科書の中に取り上げ、現代風にまとめられたというところが大変面白い作品です。これも大変な時間がかかっていると思います。だから、ページ数もかなりあります。それぞれに関して細かい解説も含めて大変手間がかかった合作だと思えます。現代そういうようなかたちで戦前の劇的な教科書を現代風にまとめたという例は他にはあまりありませんので、非常に貴重な価値で東亜同文書院の中国語教育がどんなだったのかというようなことがこの本から分かるかと思えます。

この2冊が優れているというので、奨励賞として推薦させていただいたわけであります。本人は、それ以外の論文にかかわる研究もされています。文部省のほうの科学研究費を何回かもらっていて、現在ももらっている最中だと思えます。それによって研究を深めておられるし、あるいは発展させているということだと思えます。それから、大学のほうの授業でも愛知大学史も担当されています。大学の歴史というのは、そのすべてを大学全体の共有にすべきものだと私は個人的に思っています。それにも取り組まれておられます。そういう点で、研究を幅広く学生たち

だけでなく、外の世界にも広げられたら非常にいいのではないかということで功労賞として推薦した次第であります。本日は見事にそれを受賞されたということで、心よりお祝い申し上げます。

ついでの話で恐縮ですけど、もうお一人の受賞者である蔡先生は、私と昔一緒に働いた方です。お名前を拝見して、聞いたことのあるような、ないような、もう10何年前の話だったのです、先生とお別れしたのが。本日ここへ来て、ぱつと入り口でお会いしたら、えっと思ひましてね、懐かしい。17年ぶりでした。本人ほとんど変わってないお元氣な姿でありました。先ほど阿部理事長様からお話がありましたけど、日中間、特に上海交通大学と霞山会、愛知大学も含め、どういうようなかたちで交流事業やるべきかということがあつて、愛知大学もそれに一枚かんでいたのです。当時、こういう組織のトップをやっておられたのが北川理事長で、当時大きな証券会社の副社長をやっておられた方ですけども、この方が我々と中国側の上海交通大学との扉を開いていただいて、それでこういう事業が始まりました。事務的な側面では上海交通大学に大学編纂室というのがございまして、葉先生、葉つばという字を書きます。ここでも表彰させていただいたことがありますがですけど、この先生がリーダーでした。最近ほとんど手紙のやり取りがなくなりました。まったものですか心配していました。

ちよつとプライベートなお話ですけど。その先生が上海交通大学側の代表となり、愛知大学側は私がさせていただいたのです。

あの時、初めて上海交通大学で東亜同文書院についてのシンポジウムを開催し、このぐらゐの部屋にいっぱい参加者が集まったのです。同じシンポジウムの発表を愛大側でもやらせていただいて、日中両方からの研究者で学術交流をやったのです。そして、この時も葉先生に中国側のとりまとめを色々やっていただきました。今日、蔡先生のお顔を拝見して懐かしくお話をさせていただきました。全く個人的ですが、私は地理学をやっておりますから、それ以外にも「日中地理学会議」というのがありまして、東亜同文書院の話を初めて行い、また、北京の地理研究所というところでもやったことがあります。この時もたくさんの方が集まられて、大変関心を持っていただきました。当時、日中が非常に良い時代だったとお話がありましたけれども、まさにそうです。そういう点では非常に順調にいった時代があったということもお伝えしたいです。そういう功績も蔡先生は関わっておられました。改めて懐かしく、ちよつと余分なお話をさせていただきました。そういうことも含め、私のほうからは石田先生の受賞を心よりお祝い申し上げさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔受賞挨拶〕

石田 卓生 氏

ただ今、ご紹介いただきました石田卓生です。本日は、このように榮譽ある賞をいただきありがとうございます。これは多くの方々のご支援とご協力の賜と深く感謝申し上げます。

この受賞は、私の同文書院に関する研究活動を評価していただけたものですので、私の同文書院研究について少し述べたいと思います。

私は愛知大学の文学部にあった中国文学専攻の出身です。今でこそ、同文書院の後身は愛大だということが知られるようになってきましたが、私が学生の頃は、同文書院のことはほとんど知りませんでした。竹内好の「東亜同文会と東亜同文書院」という論文に同文書院が愛大につながっていると書いてあつて驚いたぐらいです。

それがどうして同文書院について研究するようになったのか、それは日中交流についてもつと考えたいと思うようになったということがあります。これは愛大で中国人の先生に直に教えてもらったり、中国に行つてみて中国の方々いろいろなよくしてもらつたりした実体験からきています。近現代において、日中間には多くの不幸があつたわ

けですが、実際に中国に行つてみるとみなさん本当に親切なわけです。

今朝、私は新幹線で東京にきましたが、日本の都会の駅の改札でエラーでもだそうものなら、後ろに並んだ人達から舌打ちやため息をつかれて大変肩身の狭い思いをします。分からなくて人に尋ねようとしても面倒そうに避けられてしまいます。しかし、私は中国でそういう思いをしたことはありません。もちろん無愛想な人だつていますが、それでも周りの人が声をかけてくれたりして助けてもらつてばかりです。

それで私は傀儡国家とはいえ日本人と中国人が同じ場所で暮らしていた満洲国に注目して、その文学を研究テーマに修士論文を書いたのですが、関連資料に当たっていると同文書院の卒業生がたくさん出てくる、それでこの学校は一体何なんだとなりました。



ちょうどその頃、藤田先生が文科省のオープリンサーチセンターの採択を受けて同文書院研究のプロジェクトをやっておられました。私はそれにアシスタントとして参加し、そこで書院生の大旅行の報告書や東亜同文会由来の霞山文庫などの貴重な資料と接したり、同文書院卒業生の方のお話をうかがう機会を得たりするなかで、日本人と中国人の交流を考える上でこの学校は本当に重要な存在だと確信しました。本当に書院生と中国のつながりは深いのです。

例えば1期生で書院の教授を務めた坂本義孝さんは、息子で東大教授となる義和さんに「日本人は信用できないが、中国人は信用できる。自分の居るべきところは中国だ」と言い、義孝さんが病死した際には中国人が「なんという悲報だ、日本は偉大な爱国者を失った」と追悼しています。

5期生で外交官になった石射猪太郎さんも息子さんに「友人を持つなら中国の友」と語っています。

もう一例、25期生の山口慎一さんは在学時に著名な中国の作家郁達夫と交流し、その郁達夫は山口さんに「我们大家都应该联合起来，废除国界，打倒我们的共同的敌人」（私たちは協力し、国境を越えて、共通の敵を打倒しなければいけません）と文学活動を共にしようと声をかけられています。

このような例からもわかるように、書院生は中国の人々に深い愛情を抱いて一生懸命

に中国のことを学び、中国の人と関わって生きていくとしていたわけです。そして、それが中国の人にも理解され受け入れられていました。

しかし、そういうことはまだまだ正確に知られていないのではないかと思い、これはやるべきことだと考えました。

そうして同文書院について研究を始めると、世の中には同文書院はスパイ学校だったなんていう人もいるのですが、そんなのは荒唐無稽といつていいほど違うわけです。それはさきほど紹介した書院生の言葉からわかると思います。

そうして博士論文を書いて学位をとり、それをもとにして『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』を出版しました。最近と同文書院が独自に作った『華語萃編』という中国語の教科書が、戦後の愛大でも使われていたことに注目して、愛大の中日大辞典を編纂された今泉潤太郎先生の監修のもとで『愛知大学版東亜同文書院大学編纂『華語萃編』初集』を出版しております。この書院の中国語教科書を読んでみると、中国での生活が本当に生き生きと描かれていて今でもほとんどそのまま使えそうだなと思います。

また、現在、私は愛大の大学史の講義を担当させていただいております。そこでは同文書院研究の成果を反映させつつ、書院から愛大へと続いてきた歴史を現在の愛大生に理解してもらえようように努めております。私は

不勉強で書院のことなど知らずに学生生活を過ごしてしまいました。が、もし書院生のことを知っていれば、もっと意欲的にいろいろなことに取り組めたのではないかなと後悔を感じていますので、今の愛大生にはそうならないようにと願いをもつて授業をしています。

さて、これまでの私の同文書院に関わる研究はとっかかりに過ぎないと思っています。まだまだやるべきことが山積みです。この受賞を励みにして、さらに成果を出せるように努力していくつもりですので、今後ともみなさまのご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

これをもちまして受賞のあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	平成5(1993)年11月5日 上海交通大学 中日科技研究会（翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長） 科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。（東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。）
記念賞	谷 光隆氏（元愛知大学教授） 大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。
記念賞	菅野俊作氏（東北大学名誉教授 41期） 中国人留学生を支援。
第2回 平6(1994)年度 記念賞	平成6(1994)年9月16日 林文月氏（台湾大学名誉教授） 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。
記念賞	栗田尚弥氏（埼玉大学講師） 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。
記念賞	白川正雄氏（42期） 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。
記念賞	村上和夫氏（長野県中国文化研究会副会長） 中国古代瓦当文様の研究を刊行。
第3回 平7(1995)年度 記念賞	平成7(1995)年9月13日 藤田佳久氏（愛知大学教授） 大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を 刊行。
第4回 平8(1996)年度 記念賞	平成8(1996)年9月6日 ダグラス・レイノルズ氏（ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時)） 東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究（Area studies）よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。
記念賞	陳 弘氏（44期） 日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。
第5回 平9(1997)年度 記念賞	平成9(1997)年10月7日 遠山正瑛氏（鳥取大学名誉教授） 日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	平成10(1998)年9月24日 薄井由氏（上海復旦大学修士課程） 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。
研究奨励賞	水谷尚子氏（日本女子大博士課程） 書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。

第 7 回 平 11(1999)年度 記念賞	平成 11(1999)年 9 月 28 日 翟新(テキシン)氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学 研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉 永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的 研究として高く評価された。
第 8 回 平 12(2000)年度	平成 12(2000)年 9 月 29 日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを 現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第 9 回 平 14(2002)年度	平成 14(2002)9 月 26 日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜 同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第 10 回 平 15(2003)年度 記念賞	平成 15(2003)年 9 月 24 日 工藤俊一氏(元北京大学文教専門家) 「北京大学 超エリートたちの日本論―衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から 高い評価を得た。
第 11 回 平 16(2004)年度 記念賞	平成 16(2004)年 9 月 29 日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外にお ける高い評価の形成に多大の寄与をした。
第 12 回 平 17(2005)年度 記念賞	平成 17(2005)年 10 月 7 日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第 13 回 平 18(2006)年度 記念賞	平成 18(2006)年 12 月 8 日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日 本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送 した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊 行した。
第 14 回 平 19(2007)年度 記念賞	平成 20(2008)年 1 月 29 日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続 20 年間出場する中で、会の推進的役割を果た し、日中友好と国際親善のために尽力した。

第 15 回 平 20(2008)年度 記念賞	平成 21(2009)年 1 月 30 日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。
第 16 回 平 21(2009)年度 記念賞	平成 22(2010)年 1 月 27 日 葉敦平氏（上海交通大学校史研究室教授） 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。
第 17 回 平 22(2010)年度 記念賞	平成 23 年(2011)年 1 月 26 日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。
記念賞	愛知大学中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいふべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。
第 18 回 平 23(2011)年度 功労賞	平成 24 年(2012)年 1 月 24 日 藤田佳久氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長） オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。
奨励賞	武井義和氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。
第 19 回 平 24(2012)年度 奨励賞	平成 25 年(2013)年 1 月 25 日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。
奨励賞	有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを 2008 年以來ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。
第 20 回 平 25(2013)年度 記念賞	平成 26 年(2014)年 1 月 28 日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001 年には日中友好 21 世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。

第 20 回 平 25(2013)年度 功労賞	平井誠二氏（公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長） 東亜同文書院卒 3 期生大倉（旧姓江原）邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心をもち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。
第 21 回 平 26(2014)年度 記念賞	平成 27 年(2015)年 1 月 27 日 北川文章氏（霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長） 日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。
功労賞	仁木賢司氏（ミシガン大学上級ライブラリアン） 東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009 年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のデジタル化」、2014 年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。
第 22 回 平 27(2015)年度 記念賞	平成 28 年(2016)年 1 月 22 日 小崎昌業氏（東亜同文書院大学第 42 期、愛知大学第 1 期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使） 東亜同文書院大学の第 42 期生並びに愛知大学（旧制）の第 1 期生として、歴史的に関わりが深いこれら 2 つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。 また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。
第 23 回 平 28(2016)年度 功労賞	平成 29 年(2017)年 2 月 1 日 村上武氏（回光会・東光書院院長） 東亜同文書院 18 期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤麿、根津一の三先覚（聖人）を祀った靖亜神社のご神体を帰国後ご自宅（埼玉県）に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。 あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015 年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。

第 24 回 平 29(2017)年度 記念賞	平成 30 年 (2018) 年 3 月 28 日 山田正氏 (霞山会元理事長、愛知大学元理事) 一般財団法人霞山会の理事 (2006～2015 年)、筆頭常任理事 (2007 年)、理事長 (2008～2014 年) をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008 年 4 月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。 霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。
第 25 回 平 30(2018)年度 功労賞	平成 31 年(2019)年 3 月 6 日 中島寛司氏 (愛知大学同窓会元神奈川支部長) 愛知大学同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が主催する多岐にわたる行事にかかわり、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われるなど、人望と行動力は第一人者である。
第 26 回 令元(2019)年度 記念賞	令和 3 年(2021)年 3 月 10 日 星 博人氏 (東亜学院元院長) 総合商社丸紅を退職後、霞山会常任顧問に就任。翌年から東亜学院長を兼務し 18 年間中国との文化・学術・教育交流の発展に尽力された。また「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」の参画者として東亜同文書院が上海交通大学を借用した事実関係を解明するなど大きな成果を上げられた。
第 27 回 令 2(2020)年度 記念賞	令和 3 年(2021)年 3 月 10 日 大城立裕氏 (予科 44 期) 動乱の戦時下、学徒出陣を体験。沖縄帰郷後は仕事の傍ら、それまでの経験を踏まえた数々の小説を発表。「芥川賞」「平林たいこ文学賞」など多数受賞。国からは、1990 年 紫綬褒章、1966 年 勲四等旭日小綬章を受賞された。沖縄の人々からも「知の巨人」として絶大な支持を集め、沖縄琉球文化の発展などに偉大な功績を残された。
第 28 回 令 3(2021)年度 功労賞	令和 4 年(2022)年 3 月 14 日 殿岡晟子氏 (本間喜一名誉学長のご長女) 東亜同文書院大学の学長また愛知大学の創立者でありかつ学長も務められた本間喜一先生の長女として書院卒業生と愛知大学および同卒業生との交流を積極的に進められ、本間喜一先生という大きな存在を関係者の心の中に映し続けてこられた。また、愛知大学東亜同文書院大学記念センター設置の際には多くの貴重資料を寄贈する等、センターの運営・活動に多大な貢献をなされた。
第 29 回 令 4(2022)年度 記念賞	令和 5 年(2023)年 3 月 7 日 嵯峨隆氏 (静岡県立大学名誉教授) 長年にわたり中国政治思想史の研究で多くの成果をあげてこられた。近年において日本におけるアジア主義研究にも関心を広げ、その文脈で東亜同文会初代会長をつとめた近衛篤磨公の思想と行動の再評価に向けて研究を進め、その成果を上梓された。

第 29 回 令 4(2022)年度 功勞賞	越知専氏（本間喜一顕彰会名誉会長、愛知大学元客員研究員） 東亜同文書院大学記念センターの運営発展ならびに本間喜一学長の顕彰に大きく貢献。同センターの展示施設開設とともに運営委員として参画され、愛知大学入学以来写真部員として撮りためた多くの記録写真や講義ノートを提供され、展示方式などの充実化に努めた。本間先生への尊敬の念を熱く抱き、本間イズムに強く共感し、本間学長展示室の充実化、何冊もの顕彰本の刊行、豊橋名古屋両校舎と山形県川西町への本間先生胸像の寄贈、東北地方からの愛知大学入学生への奨学金給付の実現、これらに伴う多額な寄付金の提供など、東亜同文書院大学記念センターへの支援に惜しみなく力を注いであさった。
第 30 回 令 5(2023)年度 功勞賞	令和 6 年(2024)年 3 月 4 日 蔡玉平氏（上海交通大学国際合作と交流処副処長、上海交通大学日本研究中心理事、副センター長） 長年にわたり霞山会と上海交通大学との協定に基づく研究・学術交流、および留学生交流事業の大学側担当として業務に精励され、日中間の相互理解の推進ならびに研究交流の発展に貢献された。 さらに 2004 年～2006 年には霞山会と上海交通大学校史研究室が共同で行った史実に基づく「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に熱意をもって取り組み、日中双方が評価しうる成果を取りまとめるため尽力された。
奨励賞	石田卓生氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 平成三年に愛知大学文学部中国文学部専攻へ入学され、満州国文学を通して作者が書院卒であったことから東亜同文書院および中国語教育に関心を持ち、さらに愛知大学大学院中国研究科へ進学して研鑽を重ね博士（中国研究）の学位を取得された。 近年それらの成果は二冊にまとめられ刊行された。その一冊目は個別論文の成果をまとめた「東亜同文書院の教育に関する多面的研究」で、もう一冊は書院の中国語教育の根幹を担った「華語萃編」初集で現代の視点から翻訳と総訳を行いリニューアルした出色の成果として評価された。



授賞式参加者 敬称略

表紙写真参加者（写真順）

西川直恵	梅村博文	中野貴文	森 健一	鳥越 剛	吉田一弘	有森茂生	山口恵里子	木村隆治	齊本正嘉	高井和伸
倉持由美子	阿部 光	平井誠二	栗田尚弥	中山 弘	蔡 匡迪	八木好郎	大滝則忠	高橋幸紀	井上俊一	伊藤登美夫
千葉憲一	仁木賢司	鈴木正也	加納 寛	六鹿茂夫	阿部純一	蔡 玉平	石田卓生	広瀬裕樹	藤田佳久	岡村幹吉
柴田 孝	齋藤眞苗	古月雅之	他（五十音順）							

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

【2023年度受賞者】

法学部 小崎 元貴 こざき もとぎ
文学部 稲吉 佑香 いなよし ゆうか

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

【2023年度受賞者】

経済学部 杉浦 愛理 すぎうら えり
文学部 鈴木 萌日 すずき もえか



【基金会役員名簿】

(2024年2月時点)

会長

広瀬 裕樹

(愛知大学理事長・学長)

副会長

阿部 純一

(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久

(愛知大学名誉教授)

六鹿 茂夫

(霞山会常任理事)

加納 寛

(愛知大学東亜同文書院大学
記念センター長)

鈴木 正也

(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉

(岡村会計事務所)

本間先生欽慕の会

令和5年5月7日(日) 東京小平霊園



写真お名前(敬称略)

淀野敏男 中島寛司

中山弘 岩間毅 杉野彰一

中川善弘 藤田佳久

森健一 高橋五郎

鳥越剛 加納寛 八木好郎

村尾竹一 夏目益良 小林慎哉

小川千尋 齊本正嘉

伊藤登美夫 本間正久

中野貴文 戸田七支 柴垣敏秋

2023(令和5)年5月7日(日)午前11時から、東京都小平市の小平霊園本間家墓前にて執り行われました。参加者一同の黙祷、墓前に二人ずつで順次礼拝、般若心経の唱和、東亜同文書院の寮歌：長江の水/愛知大学予科の逍遙歌を合唱、墓前にて参加者全員の集合写真撮影のあと、直会会場の小平駅前の「橙や」へ移動。ビールで献杯のあと、本間先生のお人柄や人徳に触れ、功績を語りあい、歓談尽きることなく、お互い学び合ういい機会になりました。雨模様が心配でしたが、皆さんの行ない宜しく雨もなく終えました。(昭和33年卒 中島寛司 記)



荒尾東方斎先生追悼式

令和5年11月4日(土) 京都熊野若王子神社

愛知大学の源流を顕彰する「東方斎荒尾精先生京都追悼式」が今年も盛大に開催されました。祭祀開始にあたって、例年どおり御神慮によって好天に恵まれたお話を伊藤公一宮司様からお話いただきました。そして今月、愛知大学の新学長になられる広瀬裕樹先生をはじめ42名の皆さま方とともに祭祀を執行する事ができました、関わった皆さまには厚く感謝申し上げます。開催日までに隣地の生い茂った雑草を愛知大学同窓会京都支部長 射場正治様が草刈機を持参され、綺麗にされた上、式前日の草刈りボランティアも副支部長 加藤正人様と一緒に汗を流して頑張っていました、本当にありがとうございます。式当日には綺麗になった「東方斎碑」「九烈士碑」を前に祭祀を執行いただくことが出来て、嬉しい限りです。また「愛知大学史」を学生に講義されている石田卓生先生からは学生に京都追悼式の話を知りたいと仰っておられ、将来へ向けて祭祀永続を期待しております。東亜同文書院同窓会(滬友会)から愛知大学同窓会に託された荒尾精先生を顕彰する京都追悼式は来年も引き続き開催されるでしょう。参加された皆さま方、本当にありがとうございました。

(昭和52年卒 有森茂生 記)

【参加者】(順不同・敬称略)

荒尾 元、角 眞由美、高橋 剛、永井 宏治、八木 好郎、小濱 恵、杉本 たつ子、川原 元則、宇野 弘隆、磯部 晴夫、杉原 直樹、日笠 羽司名、有川 唱次、堀田 庄三、射場 正治、松山 哲彦、滝下 隆夫、中島 寛司、鳥越 剛、加藤 正人、久里 和英、樋口 裕嗣、大野 豊久、千賀 新三郎、青木 加代美、鈴木 孝博、佐藤 武史、中村 泉、井上 誠之、榎原 林、有森 茂生、中尾 浩、広瀬 裕樹、藤田 佳久、加藤 満憲、甲村 洋子、石田 卓生、中野 貴文、斎藤 芳寛、西川 直恵 計40名



山洲根津先生墓参
梅花忌
令和6年2月18日(日)
京都伏見 月橋院

今年も山洲根津一先生の祥月命日2月18日を迎え30名の方々が、ここ伏見の月橋院に参集しました。月橋院本堂で法要後、根津家墓前で香華を手向けさせていただきました。墓前では皆様が『院歌』『学生歌』を泉下の山洲先生に捧げた後、月橋院書院で藤田佳久名誉教授の特別講演「京都若王子時代の根津一」を拝聴致しました。懇親会は伏見「月の蔵人」にて行われ、東は神奈川県、西は福岡県から参集された皆さま方に御満足いただけた一日になりました。今年も梅花忌にお越しいただき本当にありがとうございました。令和8年(2026年)2月18日は山洲根津一先生の百回忌法要になります。縁ある方々の参集を山洲根津一先生および泉下の東亜同文書院生各位も望んでおられます。

(昭和52年卒 有森茂生 記)

【参加者】(順不同・敬称略)

角 眞由美、高橋 剛、堀田 庄三、小濱 恵、鳥越 剛、杉本 たつ子、鈴木 孝博、西山 秀夫、中村 泉、大野 豊久、廣部 藤一郎、射場 正治、加藤 正人、佐藤 武史、木川 敬三、銭谷 欣吾、松山 哲彦、岡崎 早苗、松本 宏美、山崎 陽介、小西 一英、有森 茂生、広瀬 裕樹、加納 寛、藤田 佳久、石田 卓生、森 健一、中野 貴文、斎藤 芳寛 計29名

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

①岡山展示会・講演会を開催

東亜同文書院大学記念センターが主催する岡山展示会・講演会『「東亜同文書院」の誕生史と「岡山」』を、2023年7月21日（金）～7月23日（日）の3日間、岡山県天神山文化プラザにて開催しました。

7月22日（土）には講演会を開催し、有森茂生様より「インターネットによる東亜同文書院史料の発掘収集」について、藤田佳久名誉教授より「岡山が生んだ岸田吟香と上海」について、土屋洋様より「晴れの国」岡山と近代中国―児島野崎家、関谷学校、日清貿易研究所―について講演が行われました。特に、7月22日（土）に開催された講演会は大好評で満席状態、一時は立ち見のお客様もいらつしやるといふ状況でした。岡山県が岸田吟香の出身地であり、東亜同文書院と強く繋がっているという点で、多くの方にご興味を持っていただけたのではないかと思います。

当日は《晴れの国岡山》らしく見事な快晴、3日間で合計158名の方々にご来場いただきました。

【展示会感想】

・愛知大学の歴史、東亜同文書院の岡山の一端を知る事が出来、有益であった。在学時、小岩井学長に受講生として愛大の創設に尽力されたことに触れた思いを新に感じられた。

・非常に豊富な資料でした。特に、書も実物の迫力を感じました。岡山まで展示に来ていただいて、見る事ができよかったです。

【講演会感想】

・貴重な資料をご紹介いただき、大変勉強になりました。

・岸田吟香以外の海外での活動もお話しに出て、興味深くお話を聞きました。

・岡山の歴史の一端が見れました。関谷学校について興味が持てました。



愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催
岡山展示会・講演会
「東亜同文書院」の誕生史と「岡山」

展示会
2023年7月21日（金）～23日（日）
10:00～17:00（※23日は15:00まで）
会場：岡山県天神山文化プラザ 地下1階 第2展示室

講演会
2023年7月22日（土） 13:30～16:30
会場：岡山県天神山文化プラザ 3階 第2会議室

◆ 13:30～インターネットによる東亜同文書院史料の発掘収集
有森茂生（愛知大学 法経学部 法学科 昭和2年卒）

◆ 14:15～岡山が生んだ岸田吟香と上海
藤田佳久（愛知大学 名誉教授）

◆ 15:30～「晴れの国」岡山と近代中国―児島野崎家、関谷学校、日清貿易研究所―
土屋 洋（名古屋大学大学院 人文学研究科 准教授）

会場
指定管理者 公益社団法人 岡山県文化連盟
岡山県天神山文化プラザ
〒700-0814
岡山市北区天神町8-54
TEL:086-226-5006
FAX:086-226-5008

※ご来場の際は公共交通機関をご利用いただく近隣のパーキングをご利用ください。

主催 愛知大学東亜同文書院大学記念センター
お問い合わせ先 TEL:0532-47-4139 Email:toa@ml.aichi-u.ac.jp
後援 一般財団法人戴山会、愛知大学同窓会、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団

②記念センター設立30周年記念講演会を開催

愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立30周年記念講演会「愛知大学と東亜同文書院大学編纂中国語教科書『華語萃編』初集」が、2023年7月29日(土)豊橋キャンパス記念会館1階ガーデンサロンにて開催されました。

戦前、上海にあった東亜同文書院大学では独自の中国語教科書『華語萃編』(かごすいへん)が作られ中国語教育で大きな成果をあげていました。東亜同文書院大学は敗戦によって閉学すること余儀なくされましたが、その『華語萃編』による中国語教育は後身校である愛知大学に受けつがれ、さらに愛知大学が誇る『中日大辞典』編纂の原動力となりました。今回の講演では、東亜同文書院大学と愛知大学の学生たちが学んだ『華語萃編』がどのような教科書だったのか、それによってどのように教育が行われていたのかを紹介。

当日は、愛知大学で中国を学んだ卒業生や中国語研究者など約20名の参加がありました。愛知大学の前身校で戦前の上海にあった東亜同文書院大学で編纂、使用され、戦後は愛知大学で1960年代まで使われていた中国語会話教科書『華語萃編』初集の特徴や東亜同文書院大学と愛知大学初期の中国語教育の取り組みについて左記の講演が行われました。

「愛知大学の中国語数学と『華語萃編』初集」

今泉潤太郎(愛知大学名誉教授・愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代運営委員長)

「愛知大学版『華語萃編』初集について」

石田卓生(愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員)



愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立30周年記念講演会

愛知大学と東亜同文書院大学編纂中国語教科書『華語萃編』初集

今泉 潤太郎(愛知大学) 愛知大学の中国語教学と『華語萃編』初集
石田 卓生(愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員) 愛知大学版『華語萃編』初集について

日時 2023年7月29日(土) 13:00~14:00

場所 愛知大学 豊橋キャンパス 記念会館1階ガーデンサロン

入場無料 (25名程度)

戦前、上海にあった東亜同文書院大学では独自の中国語教科書『華語萃編』(かごすいへん)が作られ中国語教育で大きな成果をあげていました。東亜同文書院大学は敗戦によって閉学すること余儀なくされましたが、その『華語萃編』による中国語教育は後身校である愛知大学に受けつがれ、さらに愛知大学が誇る『中日大辞典』編纂の原動力となりました。今回は、東亜同文書院大学と愛知大学の学生たちが学んだ『華語萃編』がどのような教科書だったのか、それによってどのように教育が行われていたのかを紹介します。

【お問い合わせ】

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
Tel: (0532)47-4139
Fax: (0532)47-4196
E-mail: toa@ml.aichi-u.ac.jp

写真：初集の愛知大学正門と本館(現・愛知大学豊橋キャンパス)

主催 愛知大学東亜同文書院大学記念センター

③ポール・シンクレア氏による市民講座を開催

市民講座「戦前の高等商業教育：グローバルな視点からみた東亜同文書院」が、2024年2月27日（火）名古屋キャンパス本館20階会議室にて開催されました。

講師としてカナダ・レジャイナ大学経営学部准教授のポール・シンクレア氏をお招きしました。同氏は東亜同文書院大学記念センター研究員でもあり、過去には同文書院記念報への論文掲載や愛知大学主催の講演会で発表をいただいたこともあり、従前より当センターとは深い繋がりがあります。

市民講座当日は、晴天ではあったものの風が強く少し寒さを感じる日でした。平日開催にも関わらず会場は満席となり、愛大卒業生、教職員の他、県内外より沢山の一般の方が参加されました。講座終了後の質疑応答も多くの方が手を挙げられ、東亜同文書院についての関心の高さが実感できるものでした。

【来館者の感想】

- ・東亜同文書院の偉大さを痛感しました。
- ・東亜同文書院の歴史をカリキュラム、グローバルな関係から知られてよかったです。
- ・カリキュラムがヨーロッパの影響を受けていた事を知れて参考になった。
- ・研究面でもいろいろと刺激を受けました。
- ・グローバルな視点について発見があった。ポーターレスということは、現在のディープステートの考え方に共通する。又、一橋大は東大より良い点も注目した。
- ・時代が時代ですが同文書院に学びたかった、夢の有る大学だった。愛大の先生は中国北京大学の先生と強い関係があるので日本人へもっと多く広報してほしい。
- ・日本の特に電機産業の没落への影響、逆にいうと外国をもっと知る重要性に強く感銘を受けた。




愛知大学

東亜同文書院大学記念センター主催
市民講座

戦前の高等商業教育： グローバルな視点からみた 東亜同文書院

**申込不要
参加無料**

2024年
2月27日 火 13:00-15:00

場所：愛知大学名古屋キャンパス 本館 20階 M2001・M2002
愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60-6

司会

愛知大学国際コミュニケーション学部教授・東亜同文書院大学記念センター員
岩田 晋典

挨拶

事務理事・副学長（教学担当）・東亜同文書院大学記念センター長
加納 寛

講演

カナダ・レジャイナ大学経営学部准教授・東亜同文書院大学記念センター研究員
ポール・シンクレア



20世紀前半、ビジネスマンの育成を目的にした近代的教育機関は、欧米を中心に世界各地に存在していました。こうしたグローバルな視点から比較した場合、東亜同文書院にはどのような特徴が見られるのでしょうか。わかりやすく解説しましょう。

使用言語：日本語



お問い合わせ
愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8522 豊橋市町畑町1-1
TEL:0532-47-4139 FAX:0532-47-4196
Email:toa@ml.aichi-u.ac.jp



④名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会を開催

第5回「愛知大学名誉博士 平松礼二展 ～愛の郷から世界へ～」を2023年11月11日（土）～11月18日（土）の8日間、大学記念館2階 名誉博士記念室にて開催しました。多くの方々の観覧があり、8日間で1172名の来館者となりました。

第5回となる本展では、平松氏より愛知大学に寄託された300点以上の平松コレクションの中から長年過ごした東海地方ゆかりの作品、日本各地の風景画、世界へ活躍の舞台を広げたジャポニスムシリーズの他、『文藝春秋』表紙絵（複製）についてご紹介がありました。

また、今年度はコロナ禍が明け、久しぶりに緊急事態宣言のない年となりました。平松氏はコロナの脅威が続く闇鈍とした日々の中、明日への希望を求めて画紙に向かい続け、数多くの新作を完成されました。それらは各地の美術館で公開されたのち、平松氏が名誉館長を勤める神奈川県の町立湯河原美術館・平松礼二館に所蔵されています。今回の展示では、その思いを綴った作品も交えての公開となりました。

ご来館者の方からは、これだけの作品を無料公開しているなんて、とても信じられないと驚きの声もありました。皆様より素晴らしい、楽しかったと口々に仰っていただき、とてもご満足いただけた8日間となりました。



町立湯河原美術館コレクションを交えて

愛知大学名誉博士

第5回 平松礼二展 ～愛の郷から世界へ～

さと

平松礼二氏

現代日本画壇の大家として国内外で活躍する平松礼二画伯は、ジャポニスムの集大成となる総延長90mの国内最大級の展覧作品を発表しました。2024年9月27日～2025年1月5日には、フランス・ソヴェルニエ・印象派美術館にて印象派誕生150周年の企画展として発表されます。母校の愛知大学での第5回となる本展では、平松氏から愛知大学に寄託された300点以上の平松コレクションの中から、長年過ごした東海地方ゆかりの作品、日本各地の風景画、世界へ活躍の舞台を広げたジャポニスムシリーズの他、『文藝春秋』表紙絵（複製）をご紹介いたします。また、平松礼二氏が名誉館長をつとめる町立湯河原美術館の平松礼二館に所蔵されている作品も交えて展示します。平松氏の挑戦と遊び心に満ちた彩り豊かな展覧会をお楽しみください。

学芸員によるギャラリートーク

11月11日（土）～18日（土） 11:00～14:00

愛知大学豊橋キャンパス 愛知大学記念館2階

愛知大学 AICHI UNIVERSITY

愛知大学 豊橋キャンパス 愛知大学記念館

TEL 052-564-6180

TEL 052-564-6180

TEL 052-564-6180

TEL 052-564-6180

町立湯河原美術館コレクションを交えて

愛知大学名誉博士

第5回 平松礼二展

さと

～愛の郷から世界へ～

2023年11月11日[土]～18日[土]

[観覧時間] 10時～16時

[休館日] 期間中無休

主幹：愛知大学

協賛：愛知大学学生会 / 愛知大学教育研究支援財団

協力：町立湯河原美術館 / 公益財団法人 吉川記念会 吉川美術館

入場料 無料

平松礼二展 会場

愛知大学 豊橋キャンパス 愛知大学記念館2階 名誉博士記念室

（愛知大学記念館）は愛知大学の公益施設です

愛知大学 AICHI UNIVERSITY



国際シンポジウム

- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

- | | |
|-------------|-------------|
| 2023年 岡 山 | 2011年 富 山 |
| 2022年 金 沢 | 2010年 名 古 屋 |
| 2019年 高 松 | 2010年 米 沢 |
| 2018年 岡 崎 | 2010年 京 都 |
| 2017年 浜 松 | 2009年 神 戸 |
| 2016年 名 古 屋 | 2009年 シ カ ゴ |
| 2015年 松 本 | 2008年 福 岡 |
| 2014年 広 島 | 2008年 弘 前 |
| 2014年 岐 阜 | 2007年 東 京 |
| 2013年 長 崎 | 2006年 横 浜 |
| 2012年 沖 縄 | |

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.32まで刊行)
- ・ブックレット (第9巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など



愛知大学記念館

愛知大学東亜同文書院大学記念センター



《開館時間》月～金曜日:10時～16時 《閉館日》土・日・祝および大学の定める休日